東京都立高島特別支援学校

創立50周年記念コラム綴り

令和5年度学校便り10月号から3月号まで掲載

令和５年度は創立 50 周年の年でした。「学校便り」10 月号から毎号「㊗５０周年コラム」を連載しました。

50 年の歩みに学び、これからの経営ビジョンをお伝えする機会にと考えて連載しました。ご一読いただければ幸いです（一部改題・修正あり）。

令和６年度末(令和７年３月 31 日まで）HP に掲載いたします。

コラムタイトル（掲載順）

『給食の始まり』	令和５年 10 月号
『他校への感謝』	令和５年 11 月号
『高等部設置のこと』	令和５年 12 月号
『地域の人たちと』	令和５年 12 月末号
『校章のこと』	令和６年　１月号
『校歌のこと』	令和６年　２月号
『51 年目の春です』	令和６年　３月号

「学校便り」10 月号に次の書き出しから、連載を開始しました。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

『来年 1 月 26 日（金）に、本校創立 50 周年記念式典を挙行いたします。
この特別な機会に、本校の過去と現在と未来を考えるコラムを年度末の 3 月号まで連載いたします。』

㊗50 周年
コラム 1

『給食の始まり』（令和 5 年 10 月号）

先月 9 月 15 日（金）に、給食試食会を行いました。20 名の保護者の皆様に参加をいただき、ありがとうございました。
試食会の冒頭、校長から開校直後の給食について少しお話をしましたので、当コラム最初の話題は『給食の始まり』としました。

本校の開校は昭和 49 年（1974 年）4 月 1 日です。開校当初、給食はありませんでした。
同年 6 月 10 日に「パンと牛乳」の簡易給食が始まるまでは、お弁当を持参していたようです。簡易給食開始当初は保健室の片隅に食缶を入れて準備をしていて、調理師 1 名と養護教諭 1 名が給食準備にあたって、栄養士は完全給食の準備が始まるまで配置されていませんでした。
創立 10 周年記念誌の「給食室から」というページは、全文を養護教諭が執筆していますので、開校当初、養護教諭が完全給食開始頃まで、その整備充実に向けて中心的な役割を果たしていたことが分かります。
簡易給食ですから副菜はご家庭で準備したものを持たせることがしばらく続きます。厨房と食堂設備が整ったのは開校翌年の昭和 50 年（1975 年）1 月です。4 月開校以降、お弁当を毎日持参する日常が 9 か月間続いたことになります。しかもスクールバスの運行が始まるのは開校 2 年目の昭和 50 年（1975 年）4 月です。当時の保護者の皆様は、毎日児童・生徒の送迎をしながら、朝早くにお弁当の準備も行っていたことになります。コンビニもない時代です。大変なご苦労を重ねられたことでしょう。

ご苦労は大きかったものの、開校の喜びと給食開始の喜びは大きく、子供たちは簡易給食が始まると嬉しくて、保健室の給食準備の様子を覗きに来たそうです。
保護者の皆様が、副食（おかず）の研究をしたり、教員と共に食事の実態調査を行ったりして、拒食、過食、偏食、肥満や糖尿病への対応等を検討して、給食の充実を進めていった

と記録にあります。
　記録から、学校に関わる人たちが、一生懸命に学校給食の充実に力を合わせて、一つ一つの課題に対応していた様子が伝わってきます。
　完全給食が始まる少し前に食堂の利用が開始されて、当時は 4 年生以上が食堂で給食を食べたそうです。新しい食堂での給食は、とても嬉しく楽しいことだったでしょう。

　昭和 51 年（1976 年）5 月から月一回程度の「野外給食」を開始したそうです。この取組の終期は定かではありませんが、昭和 58 年（1983 年）時点では、5 月から 11 月の第一金曜日に、赤塚公園、屋上、校庭などで、給食として提供されるお弁当を食べることが子供たちの楽しみだったとあります。

　さて、写真は先日実施した給食試食会のメニューです。この日のメニューは

　①ジャージャー麺
　②五目豆乳スープ
　③フルーツかん
　④牛乳（低温殺菌）です。

　写真（下）の左はごく少数の児童・生徒が喫食する中期食です。右は普通食です。

　提供される普通食も中期食も色彩鮮やかで美味しそうです。
　毎日の給食は、本校の栄養士が専門性を発揮して、メニュー作り、食材選定、食材納入業者の選定・契約・その他の管理を行って、給食調理委託業者の調理員に具体的な調理方法まで指示をして提供しています。厨房等の管理は、委託業者はもちろんですが経営企画室が日々対応しています。現在は歯科医の西村滋美先生が来校して、給食の時間に校内を巡回して個々の摂食相談も行っています。給食開始当初は教職員を合わせても 70 食程度の規模だったものが、現在は 450 食を超える規模です。開校当時の人たちは、今の給食とそのしくみに驚くことでしょう。

　10 月 4 日には、校外学習等での再調理を想定した研修を一部の教員に行います。
　あらためて 50 年前に給食が始まった当初の子供たちと保護者の皆様の嬉しそうな様子を想像します。先人の熱意と営みによって豊かになった今も、さらなる充実に向けて努力を重ねてまいります。

㊗50 周年
コラム11

『他校への感謝』（令和 5 年 11 月号）

長年、本校と交流を重ねている交流校が 4 校あります。

〇板橋区立高島第三小学校

〇板橋区立高島第五小学校

〇板橋区立高島第三中学校

〇東京都立高島高等学校　　　です。

その中から 50 年の交流を重ねてきた 2 校との開校当初のエピソードをお話しします

〇板橋区立高島第五小学校（高五小）

次の写真は昭和 49 年（1974 年）4 月 15 日の本校第一回入学式のものです。小学部 49 名が入学しました。第一回入学式会場は**高五小体育館でした。**

初代校長高橋先生が次のように書き残しています。

『四月十五日。第一期工事完成間近の新校舎を望みながら、高五小体育館をお借りして、入学式を挙行しました。（中略）あと一週間も待てば自分たちの校舎が使えたのですが、私たちはその一週間が待てなかったのです』（十周年記念誌 4p）

入学式に先立つ 4 月 4 日には高五小で一日入学を行ったそうです。高橋校長先生は『ご好意は、私たちを大きく勇気づけてくれました』と述べています。ほぼ同時期に開校して学校運営を安定させる最中だった高五小のご協力に頭が下がります。両校で覚えておきたい出来事です。

12 月 9 日は高五小の創立 50 周年記念式典です。感謝を込めて参列してきます。

〇東京都立高島高等学校（高島高校）

最近まで吹奏楽部が本校に演奏に来てくださって子供たちも楽しみにしていました。大雪の日に野球部員が雪かきを総出で手伝ってくれたこともありました。高島高校と本校は同時進行で建設が始まりました。

写真は建設中の本校校舎です。本校の建設作業が遅れて高島高校の建設現場から何日も

建設の応援に来てくださったそうです。現在では考えにくいことです。

開校当初、校舎の半分は未完成の状態で工事区画との境目はベニヤ板で区切られていました。ベニヤ板の隙間から工事現場に入り込む児童・生徒がいたそうです。開校3年目の昭和五十一年（1976 年）8 月までは両校の敷地の境には植栽しかありませんでした。児童・生徒の中には高島高校の生徒の更衣室に何度も入ってじっとしていたり、**『親切に対応してくれる保健室や、事務室や、職員室にはいり込んで、お茶をごちそうになりながら』**（十周年記念誌 32p）本校からの迎えを待ったりする児童・生徒が何人かいたそうです。微笑ましくも思いますが、不十分な施設設備の中で子供たちが安心して学べる環境となるまで、本校はもちろん、高島高校にもご苦労があったことでしょう。

11 月 2 日は高島高校の創立 50 周年記念式典です。感謝を込めて参列してきます。

㊗50周年
コラムIII

『高等部設置のこと』（令和 5 年 12 月号）

平成元年(1989 年)に板橋養護学校（現板橋特別支援学校）が開校する前、**ある年の中学部3 年生の進路先分布は 14 人中 11 人が王子養護学校に進学、3 人が通所施設利用**となっていました。現在、中学部卒業後に福祉施設に通所することはほぼありません。王子養護学校には高等部があるのに、なぜ進学しない生徒が 2～3 割もいたのか、調べてみました。

昭和 58 年(1983 年)7 月に発行されたＰＴＡ広報誌「高島だより第 36 号」に「高等部の問題を考えよう」と題して次の記述があります。

『本校卒業生の進学先は王子養護学校に限られています。ラッシュ時の通学や送迎のための負担を考えると、進学を見合わせ、進路先を変更しなければならない状況もでてきています。』

学校要覧を遡ると昭和 60 年(1985 年)～昭和 63 年(1988 年)は 4 年間で本校の在籍数が99 人増えています。これは王子養護学校(当時)の過密解消のため本校に高等部を 4 年間「暫定設置」したからです。

王子養護学校の過密化も深刻でしたけれど、板橋地区に高等部設置校が無かったので、近くに『高等部のある養護学校があったらどんなにいいだろう』との思いを、本校に縁のある多くの人たちが共有していました。本校の保護者や教職員だけでなく地域の心障学級(当時)の保護者の皆さんが、およそ 6 年間運動を重ねて板橋養護学校の開設を実現します。当時のＰＴＡ広報誌には高等部設置にまつわる様々なエピソードが記録されています。

板橋養護学校開校前年の昭和 63 年(1985 年)の記録に建設予定地周辺の住民説明会を行った際のエピソードが書かれていました。『どうしてここに迷惑施設をつくるのか』という

質問があったというのです。

都内公立小・中・高校に通う子供たちは 95 万人を超えます。都内公立特別支援学校に通う子供たちは 1 万数千人です。副籍交流や学校間交流の充実は当然のこととして、特別支援教育とそこに通う子供たちやご家族のことをよりよく知ってもらう営みの大切さをいつも意識して、途切れずに伝え続けることを重ねたいです。

間もなく、12 月 13 日は中学部 2 年生の進路保護者会です。

年明けに中学部 3 年生は、高等部への入学願書提出が待っています。

㊗50 周年 コラムⅣ

『地域の人たちと』（令和 5 年 12 月末号）

本校を開校した昭和 49 年度の終わりに、「たかしま」という 1 年間の実践をまとめた冊子が発行されています。右写真は「たかしま」の第一号です。題字は、初代校長 高橋辰久の筆によります。お人柄が伝わってくるようです。「たかしま」は、いわゆる研究紀要です。

開校当時、校長、教頭、養護教諭を含めて教員系は 16 名でした。事務は警備員が 2 名配置されていた時代で総勢 10 名でした。校舎も未完成で教育内容も定まっていない状況でしたのに、よくぞ実践を冊子にまとめられたと驚きます。初代教頭小島吉一が「たかしま」の 8 ページに『地元の協力』という項立てで記録を書いています。

『通学の安全対策のために －中略－ 横断歩道信号を設置してくださった志村警察署。隣接する赤塚公園にはいろいろな無理なお願いをしている。中央卸売市場からは毎月定期便でこどもたちのもっとも喜ぶ果物をご寄贈いただいている。－後略－』

現在は志村警察署ではなく高島平警察署にお世話になっています。当時の進路指導の記録に**『中学部は原則として自主通学を目指す』**ことを基本方針としていたとあります（「たかしま」第三号 50 ページ）。高島高校前の横断歩道に信号が設置されてほっとしたことだろうと想像します。赤塚公園にどのような無理なお願いをしていたのかはとても気になりますけれど、中央卸売市場（板橋市場のこと）とのつながりに話を移します。

右写真は板橋市場公式 HP が掲載元の板橋市場全景です。

創立十周年記念誌の 25 ページに関連する記録がありました。開校初年度に荒川土手まで校外学習に行った時のことです。板橋市場で働く A さんが「何かお手伝いさせてください」と声を掛けてくださったそうです。A さんのお子様は都立青鳥養護学校の卒業生でした。この出会いの後に、A さんは板橋市場の自治会役員に働きかけて、板橋市場の自治会をあげて本校に支援をいただくことになります。具体的には毎月青果の無償提供と PTA 主催のバザーにも破格で成果を卸してくださったとのことです。このつながりは開校から 10 年以上続いたようです。本校からは、お礼に子供たちが陶芸で灰皿を作って自治会に差し上げたということです。

平成 7 年に発行された創立 20 周年記念誌の 34・35 ページに、本校と関わりの深い 3 町会の会長からのお祝いの言葉があります。

高島平三丁目会長さんは、公園で先生と共に運動している子供たちの明るく一生懸命な姿に励まされるということを書かれています。

高島平三丁目自治会長さんと、**高島町会長**さんは、毎日の通勤通学の折に本校の子供たちと挨拶を交わすことで、心が通じ合うようになったエピソードを書かれています。高島町会長さんはそうしたエピソードに続けて次のように書かれています。

『人は誰でも誠意をもって接すれば、心が通じ合うものだと痛感しております。以前、障害者の施設建築に際し、通学路の商店街などの反対運動があったと新聞記事で読んだ覚えがあり、反対の理由は存じませんが、施設その物には理解できると信じますが、之は、行政と地域との対策の欠如からではないかと思います。地域と学校が交流を密にすることによってその地域との理解を得るものと信じます。』

板橋市場の話と町会長さんたちの言葉を美談のようにお伝えしたいのではありません。エピソードや言葉から、子供たちと出会ったり、日常的に見かけたりすることが、人の心に変化を起こしたり、行動を起こすきっかけになったり、理解充実が進むのだという、シンプルで当たり前の取り組みの意義をあらためて教えていただいたように感じたのです。

本校の学区域は広域です。スクールバスが配車されています。高島平地区にお住いの児童・生徒が多いわけでもありません。地域に住んでいる子供が通う小学校や中学校と、本校の成り立ちは異なります。

高島町会長さんの言葉が響きます。理解充実を図るためには『行政と地域との対策の欠如』を補っていくこと、『地域と学校が交流を密にすること』が必要だと、当たり前のことを地道に続けなさいと励ましていただいているように思います。

今月は「副籍を語る会」がありました。そこで語られた保護者の皆様や、そこで語られなかった保護者の皆様の思いに、きっと通じることのように思います。地域の人たちとのつながりなくしてインクルージョンは成り立ちません。学校にできること、学校が行うべきことを考えて整理して、地道に続けていきたいと思います。

㊗50周年
コラムⅤ

『校章のこと』(令和６年１月号)

本校の「校章」は、開校から 10 年経った昭和 58 年(1983 年)に「校歌」と共に制定されました。校章に込められた思いの公式な説明は次のとおりです。

校章について

本校の校章は10周年を記念して制定された。
９人の人が、輪になり手をつないでいるデザインは、本校の教育目標である

1．健康で明るい子
2．意欲をもってがんばる子
3．みんなと仲良くできる子

を象徴し、子どもたちがしっかりと手をとりあって、大地に友情の和、青空に希望の輪を広げていきたいという願いがこめられている。

「９人の人」の意味は小学部・中学部設置校だから**９学年の意味のはず**だと考えて調べてみました。昭和 58 年(1983 年)年の学校便り 3 月号の「校章が決まりました」という記事の一部を引用します。

『小学部、中学部９学年の力強いチームワークを表したもの』

本校は校章制定からわずか 2 年後の昭和 60 年(1985 年)4 月に**高等部設置校**になりました。平成元年（1989 年）4 月に板橋養護学校(当時)に高等部が移行するまで 3 学部 **12 学年設置校**でした。当初の意味を引き継ぎにくく校章を積極的に使えなかったのでしょう。

創立から 10 年ごとに編纂している記念誌の創立 20 年と 30 年には、その表紙にすら校章が登場しないのです。

「校章」は使い続けることで馴染んで愛されて、「シンボル」となります。お便りや各種手引きや要覧など、学校が作成する様々な文書や冊子に校章が使われていないことを残念に思っていました。

これからはどんどん活躍してもらうことにします。

ブレザーやジャケットの襟にぜひどうぞ！

㊗50 周年
コラムⅥ

「校歌」のこと（令和６年２月号）

校歌は創立１０周年記念式典で披露されました。校歌制定から 40 年目となります。作詞作曲は当時の教員が担当しています。

岡本正子　作詞
高橋勝代　作曲

１．空はかがやき　鳥はうたい
みどりの丘に　つづく並木
仲良く　元気に
まっすぐ進もう

２．朝に夕に　風わたり
みんなの願い　はこんでく
学舎　高島
ぼくらの学校

〇岡本先生の言葉です。

『よく晴れわたった日に、すずかけ通りを丘に向かって歩いてみませんか。背筋を伸ばして、空を見上げると「仲良く、元気に、まっすぐ進もう」きっとそんな気持ちになると思います。』

〇高橋先生の言葉です。

『歌が好きで、リズム感のいい高島の生徒が楽しく歌えるメロディということで考えました。』

４０年前の教員が感じていた高島特別支援学校の子供たちの雰囲気や特徴は、脈々と受け継がれているように感じます。

岡本先生の記録に興味深いことが書かれています。

『一・二番の間にもう一つ詞がありました。
身体（からだ）を　きたえて　心あわせ
希望に　むかって　くじけずに
活く（はたらく）　力を　伸ばしていこう』

(以上引用箇所全て２０周年記念誌 18p)

子供たちの未来が活き活きとしたものとなるようにとの思いが込められているそうです。

校歌の歌詞のように現実は美しく運びません。

でも４０年後に生きる子供達は、元気に校歌を歌っています。歌声に励まされて、私たちは、子供たちの未来が拓かれるように、共に学び、努力を重ねていきましょう。

㊗50周年
コラムVI

51 年目の春です(令和 6 年 3 月号)

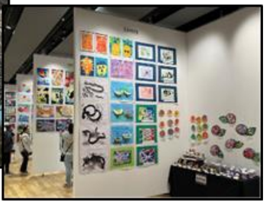
最後のコラムです。

創立 50 周年記念を迎えた一年間、この地で、障害を有する子供たちが活き活きと生きられる地域づくりに、学校が取り組めることを考えてきました。

次の写真は大雪の降った翌日の２月６日の写真です。高島高校の生徒たちが始業一時間遅れなのに７：40 頃にサッカー部と野球部の生徒が大勢雪かきに来てくださいました。

コロナ禍、途絶えかけていた高島高校の生徒たちとの交わりは、雪のおかげで、当たりまえのご近所付き合いが戻ってきた感じがしました。

次の写真は第 74 回板橋区立小学校児童作品展の様子です。梅が咲き誇る中、板橋区立美



術館の素晴らしい展示スペースに、本校の子供たちの作品が小学校の子供たちの作品と共に展示されていました。学校名以外の説明書きは特にありません。お客様の中には特別支援学校の作品なのだと最初は気付いていない方もいました。アートは障害の有無を超えて人をつなぐように感じました。学校の説明が無くても作品が雄弁に語ることに気づきました。

次の写真は高島三中の生徒がボッチャ交流会の後に寄せてくださった感想の綴りです。

多くの子供たちが「ボッチャを一緒に楽しめたこと」「高特にボッチャが上手な生徒がたくさんいること」「非言語のコミュニケーションが当たり前のようにあること」「理屈抜きに楽しめた自分自身がいたこと」への驚きを率直に書いています。試合を共に楽しむ中での気づきを自覚していました。子供達はこうした体験を通して多様な人と生きることに馴染んでいける可能性があります。

２月 26 日にＰＴＡ会長様と校長とで赤塚公園の「パークミーティング」に参加してきました。赤塚公園がこの地域に暮らす人たちの営みをつなぐ場になるように願う公園側の方たちと、関係する自然保護活動の団体、町会、保育園、小・中・特別支援学校関係者、地元新聞社、区行政担当者などが一堂に会しました。 地域を盛り上げるイベントのアイデアが語られる一方で、自然保護を願う人達と、自然が豊かであるために虫やカエルやヘビなどの生

き物が出てきたり大量の枯葉が落ちてきたりすることへの苦情が寄せられて困っていると訴える人たちとの対話もありました。同じ場所で同じものを見ていても、思っていることがこんなにも違うのかと気付きました。大人同士が共感しあっていくことはとても難しそうです。

　昨秋、赤塚公園では高島高校の数百人の生徒が２日間にわたって 10ｔもの落ち葉を片付けたそうです。実は本校の子供たちも公園の落ち葉清掃を継続して行っています。

　近くの保育園は公園からの働きかけで「お花にお水あげ隊」と称して、園児が水を上げる取組を続けているそうです。

「落ち葉清掃」や「お花に水をあげ隊」の活動に地域をあげて一緒に参加したらどうでしょう。日程の調整さえできれば、雪かきやボッチャや美術展を共に体験したことと同じように、仲良くなれるチャンスがあるはずです。私たちも特別支援教育や障害についてよりよく分かってもらおうとすることにとらわれ過ぎないで、ゆるやかなつながりの機会を作ることを考えてもよさそうです。パークミーティングには、地域の皆さんと共に取組めることのヒントが幾つかありました。

　５１年目の春は、赤塚公園と対話を重ねて、何か活動を共にできることを見つけたいと思います。東京都立高島特別支援学校のこれからの営みにご期待ください。

　そしてこれからもご支援ください。